

時代はオーウェルの想像力に近づく

長谷川 修

ジョージ・オーウェルの『一九八四年』は大戦直後の1948年に書かれ、全体主義国家の思想統制や人格改造などを描いている。

ここでは、双方向の大型画面「テレスクリーン」が街角や家庭に設置され、国民の行動は逐一監視されている。また「二重思考」が強要され街中（まちじゅう）に「戦争は平和なり、自由は隷属なり、無知は力なり」の標語が掲げられ、危険思想は「二分間憎悪」等の集会で糾弾される。

主人公は報道担当の「真実省」記録局で歴史や統計の改竄に取り組み、恋人は思想担当の「愛情省」創作局でプロール（隷属的労働者）向けのボルノ小説を量産している。このような中、主人公は危険をかえりみず自由に日記を書くことを望み、恋人との密会を楽しむ。細心の注意をもって進めたつもりであったが、行動はすべて当局に把握されており、終局的には過酷な取り調べと凄惨な拷問によって二人は廃人にされる……。とディストピア（反ユートピア）小説である。

現実の1984年から略40年が経とうとしているが、時代はオーウェルが75年前に想像（創造）したことに近づいているようだ。

ここ40年間のITやインターネットの進展は驚異的であり、ビッグデータ処理と双方向通信の普及で、「テレスコープ」の監視社会は既に実現している。「二分間憎悪」の場面では品性に欠けたヘイトスピーチを連想し、主人公の「真実省」でやっている仕事には公文書の改竄や破棄を思う。トランプ政権時代に流行語となった代替的（オルタナティブ）真実やポスト真実（トウルズ）は、まさしく「二重思考」だ。

脇筋となるが、この国では「ニュースピーク」なる言語を完成させようとしている。この言語は、単語の数を究極まで減らし語意を単純化し、国民に深く考えることを禁じるためであるが、これも昨今のSNS普及による論理的文章の衰微を思わせる。

近未来小説で予測が当たったかどうかはそれほど本質的な問題ではない。それにしてもこの作品では、時代が小説を追いかけているようで不気味だ。